



# LIBRARY

いわき総合高校図書委員会 平成27年10月号



## 今月のオススメ

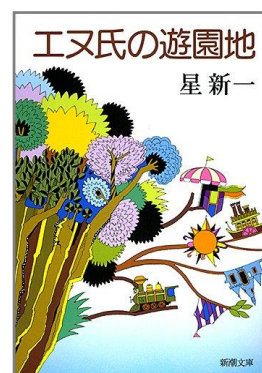


### 《エヌ氏の遊園地》 著者：星 新一

平凡な毎日を送る青年は、ある日バーで知り合った男に奇妙な提案をされる。それは、男が強盗のふりをするから、青年が大勢の前で追い払うというものだった。[昇進]

2人の男はどろぼうだった。真夜中、2人は警察から逃げているうちに列車に乗り込んでしまう。発車してホッとしたのも束の間、車内は人がいるにもかかわらず不気味なまでにシ～ンと静まり返っていた……。[逃走の道]

『エヌ氏の遊園地』は、星新一の奇想天外なショートショート31編を収録。特にお勧めなのは、上記の「昇進」と「逃走の道」です。何回読み返しても飽きの来ない話の構成、クセのある登場人物の話し方。とても短い物語なので、休み時間に手軽に読めるおすすめの1冊です。 (YH)



### ◆図書だより編集部より◆

現在、いわき市立草野心平記念文学館において、企画展『星新一・星一展』が開催されています。企画展のタイトルが「星新一・星一」となっていますが、“星一”とは星新一さんのお父さんの名前です。星一さんは、いわき市錦町の出身だそうです。“いわき”と縁があるんですね。

星新一さんが亡くなられて18年近くなりますが、彼の作品は未だ色褪せることなく、読み継がれています。特に中高生に人気があるようです。先日行った図書アンケートでも、好きな作家や作品に挙げられていました。昨年6月号では、野口教頭先生が「先生のオススメ」欄で星新一さんの『ノックの音』を紹介してくださいました。読書嫌いだった教頭先生が、中学生のときにこの本と出会い、本を読むきっかけになったそうです。

草野心平記念文学館の企画展『星新一・星一展』は、12月23日(水・祝)まで開催しています。小・中・高生は、土曜日・日曜日無料です。図書委員オススメの本とともに、草野心平記念文学館で“星新一”の世界に浸ってみませんか？



## 読書週間

10月27日(火)～11月9日(月)は、読書週間です。  
本校図書館にも新刊図書が多数入りました。

「食欲の秋」、「スポーツの秋」、「芸術の秋」

といいますが、“読書の秋”も忘れないでくださいね。

秋の夜長、TVやゲームのスイッチを切って読書に耽るのもいいかも……。



### 《面白くて眠れなくなる数学》 著者：桜井 進

身近なところにある数学や、偉大な数学者にまつわる話など、25個のテーマについて書かれている。例えば「おならの匂いは半分でも やっぱり臭い？」や「マンホールはなぜ丸い」、「 $1+1=2$ って本当？」など、興味深い数学にまつわる小ネタ集。

「数学は旅 イコールというレールを数式という列車が走る」本書の「はじめに」の中の一文である。著者の数学に対するイメージとのこと。受験のための数学とは違い、数学の奥深さ、過去の数学者の歩んできた道など読みすすめるにつれ、数学という旅が満喫できる一冊。

#### ☆生徒へひと言☆

本書は、数学嫌い・苦手の人でも楽しく読める内容である。ぜひ手にとって、自分の気になるテーマから読みすすめてはいかがでしょうか。



人気の『面白くて眠れなくなる数学』シリーズですが、ほかにも「超・面白くて眠れなくなる数学」、「超・超面白くて眠れなくなる数学」、「面白くて眠れなくなる数学 プレミアム」があります。ある数学者は、数式や証明を“美しい！”といます。文系のあなた、一度読んでみませんか！

## 新刊案内😊

### 《流》 著者：東山 彰良 **2015年 第153回 直木賞受賞作品！**

1975年、台湾。国民党総統の蒋介石が死去した日に、愛する祖父が何者かに殺された。それを発見したのは孫の秋生・17歳の高校生だった。秋生はすさんだ生活をしながらも祖父の死の真相を追っていく。高校は退学処分となり、転校した底辺校ではケンカに明け暮れ、不良仲間とのドライブでは幽霊に遭遇、初めての恋も……。台湾から日本へ、そしてすべての答えが待つ大陸へ。歴史に刻まれた、一家の流浪と決断の軌跡。

直木賞の選考会では、前代未聞の満場一致で決定！ また、選考委員のコメントも印象的でした。「20年に一度の傑作。とんでもない商売敵を選んでしまった。」**選考委員：北方謙三氏**  
「私は何度も驚き、ずっと幸福だった。これほど幸せな読書は何年ぶりだ？」**選考委員：伊集院静氏**

**余談** 東山彰良さんは、台湾のご出身です。ペンネームの東山はルーツである山東省から取っているそうです。以前から、国民党の軍人として、蒋介石とともに中国大陆から台湾に渡ってきた祖父の物語を書きたいと考えていたそうです。そして、主人公の秋生は東山さんのお父さんがモデルだとか……。

ご両親が広島大学に留学していたこともあり、お父さんが福岡で教師の職を得、9歳のとき日本へ来たそうです。学生のころはギターやバイクに夢中で、本は全然読まなかったそうです。大学卒業後サラリーマンを1年経験し、その後大学院で研究の道へ。皿洗いのアルバイトをしながら論文を書く生活を送るも挫折。直木賞選考委員お二人のコメントを聞くと読んでみたくなりませんか？

